

おもひ出のまゝに

—東京女子高等師範學校附屬幼稚園—

新庄よしこ

昭和八年一月には新園舎での保育を始めますので、この月の終りに、それも年の暮れに迫つて世の往來も一しほしげきその頃、私共の幼稚園は、こゝ湯島の臺から小石川區大塚町に移轉するのでございます。

建物はもう去年の中にすつかり出来上つて居りますし、引越しいふことは、もう四五年前から決つて居りましたことで、それよりも前に、バラツクのこの假りの住居に移る時、すでにさう云ふことをおぼろげに聞いては居たことなのでございますが、さだめごとゝしても、さきさき遠いことゝ思つて居りました。

とかく現今のことに追はれがちなのは、世の常のことでございますから、舊きを顧みるといふような事は、よほどの物好きか、さもなくばよくゝそのことに迫られての上でなくば出来もしますまい、私共もつい毎日の保育にあくせくと暮して居りまして、自分の幼稚園の經て來た跡をはつきりと顧みる機會もついぞございませんでした。

然しかうして、五十七年も住み慣れた所にいよく別れを告げるとなれば、あまりにも縁故の深いこの地への心のこりもさらに憶はれて、現在見聞きした事の外に數々の出来ごとが、ほんの些細なことでもまことに思ひ出深くうつりますので、こゝでの五十七年間のことゝもを、あらし一つにまとめて眺め返して見ようかと存じます。

さう思つてぼつゝ前々からの記録などをたどつて見ますと、この幼稚園でくらしてまゐりましたものは申す迄もなく

随分皆様とも御縁の深いふし／＼もあるやうに思はれますし、又この幼稚園の移轉について何かとお心におかけ下さる方々もかなり多いやうに思はれますので、皆様の雜誌、この「幼児の教育」誌上に、長い間のお茶の水時代とも申しますものを遺しまして、これが幼稚園語りぐさの一はしともなればと思ふのでございます。

これを、時代を通じて、夫れぞれのお方にお願ひして書いて頂いたらといふ話も出まして、さう願へればまことに仕合せで、さらに得がたい記録が出来ますことと思ひましたが、それがさうと氣がついた時は、編輯々切に餘日幾ばくもないといふ時で、——この秋を特に忙しく暮してまゐりましたので——お願ひするのはあまり失禮かと思ひ、おぼつかなくもひとりで筆をとりました、事がらの薄き濃き、時の間遠まぢもそれ故とおゆるし下さいませ。

お茶の水から大塚へ

移轉に關することの第一として場所を申して見ませう。お茶の水幼稚園、もう幼稚園關係の方々は申す迄もなく、世の一般でも、お茶の水とさへ申せば、土地柄を指すよりもこの學校全部をおもふ親しい名となつてゐるのでございます。勿論お茶の水と申すのは、只今の水道橋邊から昌平橋あたりへかけてのひろい地名でございます。

お茶の水趾

水道橋の下流から冒平橋に至る神田川の兩岸は昔時は風景佳絶で小赤壁又は茗溪と稱して愛賞された。將軍家のお茶の水に用ひられたといふ清泉は享保度の川幅擴張の際にその趾さへなくなつた。(東京の史蹟)

私共の知る限りでも、川の兩がはからの茂みで、流れの水が木の間を洩れて僅にみられるやうな木深いところ、四季の

眺めは趣深く、名高き繪の師によつて、お茶の水の雪景など、東京名所圖繪の一つにうつされたものでございます。

神田川に橋が出来て、それをお茶の水橋と名づけるようになってからが、特にお茶の水女學校お茶の水小學校、お茶の水幼稚園といつの間にか人々がいひならはしたのでございませう。

鈴木町の木橋

湯島の女子師範學校前より駿河臺鈴木町へ木橋を架するといふ咄しは五六年前より聞く所なるが其は唯掛けたら定めし便利ならん位の談話に止りいつも聞流れとなりしが此頃又聞く所によれば今度駿河臺の重立たる人々の計畫にて錢取り橋の營業にはなく眞に便利のために架設することにほど決定したりといふ、(原文のまま)

明治二十一年七月五日の日々新聞にかういふ記事がありますがそれがお茶の水橋のことでございます。ですからお茶の水と申す名稱もこれ以前には用ひてゐなかつたのであらうといふことが推はれるのでございます。

お茶の水幼稚園が、ほんとうの名稱ではないと重々知つて居りましたが、知らず／＼これを口にいたしますし、又時にとつては、この方が一般へは通りのよいこともありまして、長い間用ひつゞけて來たこのお茶の水の名稱を、最も名残り惜しく思つて居ります。あちらに移りましてもさしあたり好ましい名もございませうまいから、これがどうなりますことか引越しと知れてから殊にみな様がこのことをおたづねになるのでございます。

湯島はもと／＼學問の發祥地で、昌平齋に隣して幼稚園のはじめがひらかれたのも、思へばゆかりの深いことではございませんか。

今度參る大塚はもと陸軍兵器本廠のあつたところ、あたりがまことに廣々として居りまして東京市内にこんな所もあるものかと思ふ程でございます。土地について、とりたてゝ記すやうなことはまだ存じませんが、あのもの寂びた湯島の

聖堂の屋根を震災と共に失つて眼にさびしく思つて居りましたが、新園舎に近き護國寺の屋根は更に古きをかたるにふさはしいもの、これにつゞいて音羽の森の鬱蒼としたながめを近々に見ることが出来ますので、幼児と共にする散策に一段とよい場所かと思つて居ります。

行幸 行啓 臺臨

附屬幼稚園の開園は明治九年十一月でございますが、この翌年即ち十年十一月二十七日には 皇后陛下、 皇太后陛下お揃ひになつての行啓がありまして、この日を幼稚園開業式と申して大さう盛大に行はれたのでございます。でございますから實際の開園は九年十一月十六日でございますが、正式に申しましたならばこの十年十一月二十七日が名實共にわが國幼稚園の開園の日と心得られるのでございます。

わが國で始めての新らしいこの試みが、——その時にはすでに、保育法が當時の保母の手によつて、用意されては居りましたでせうが、——實際に幼児をあづかつて見ては、どのやうにそれを運用して行くべきかは皆目わからなかつたことございませう。開園してみれば書物の上ではかくあるべきことも、そのまゝには用ひられなかつたふしぐも思ひあたることがあつて、機に臨んでの處置もほど會得が出来ないのでございませう、兎に角開いてから一年の間、實際にあつて見ての上で開業式のあつたことは、あとから考へて見ますればまことに適當なことと思はれるのでございます。この日には幼児が、あの「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ」のうたを歌ひ、この遊戯をいたして御覽に入れましたさうで、「幼稚園唱歌し、保母音楽を奏せしかば、園中にさんざめきわたりて、面白かりければ、御氣色もいとめでたかりき」などの記が見えて居りますが、いかにもなごやかな情景が想はれるのでございませんか。

またその頃の風俗などから考へて見ましても、幼稚園の玄關には古代紫の幔幕うちまはし、正面のしほりに大きき、ひき結んだ同じ色の打ひもも床しく、この中を、兩陛下の御姿はいかに氣高くも美しくあらせられたこととございませう。うち續く馬車から降り立つて、陛下のおんあとにしたがふ緋の袴の女官方、さながら錦繪をそのまゝ見るやうでございませう。たことと思はれます。

つゞいて十四年五月にも行啓あり、この時御覽んに入れた遊戯が大さう新らしいもので、さすがに、えらいものとの新聞記事もございました。

十九年には、明治天皇陛下の行幸がありました、この時は、本校が東京師範學校女子部でございましたから、東京師範學校への行幸で、幼稚園幼兒の遊戯や手技をも御覽になつたのでございませう。

爾來二十回近き行啓、臺臨の光榮に浴して居りますことは、獨り附屬幼稚園のみが荷ふべき榮譽としてはあまりに畏れ多いことで、代々の皇后陛下、皇族方が幼兒教育に御心を注がれ給ふ尊いあらはれで、わが國幼稚園のすべてが持つところの尊き矜であると存じます。

又、いつの行啓の折にでも幼稚園ではとかく御豫定の御時間がのびがちであつたことも一こと申し添へておきます。

附 屬 幼 稚 園

もうすでに皆様がよく御存じのやうに、幼稚園は、明治九年十一月に女子師範學校の附屬として設けられたものが、わが國に於ける本格的幼稚園のはじめでございます。尤もその以前にも、斯様の企てが試みられたもの二三がございませうが、いづれも幼稚園の名稱を用ひて居りません。今日迄、かくの如く永く廣く用ひられて來ましたこの名稱を冠するものゝ始

めがこの幼稚園なのでございます。

あの西南の戦ひが明治十年、その一年前には、すでに幼稚園といふ存在がありましたわけで、思へば、初等教育の手はじめとしては、相當に早かつたと申すべきでございます。

女子師範學校の附屬校園としては、高等女學校、小學校、幼稚園とかう三つございます。その中幼稚園が最も早く開かれました、この度も亦幼稚園の建築が最も早く完成致しまして、本校と共にまづ第一に移るのでございます。それはとりたてた因縁といふことではなく、小學校、女學校に比して種々の點で着手しやすいからかと存じますが、これが附屬校園打ち揃つての移轉であつたらとも思ふのでございます。

さて、幼稚園が今日迄、五十七年間どう過して來たかについては、只今こゝで簡単にいひ盡すことは到底出來ないのでございまして親しく保育にたづさはつた保母の方々のお口から、或は又文献による記録をたどつて見ますと、只一つのこの幼稚園だけでもなかく、多くの資料を持つのでございまして、従つて廣く幼稚園界もまことに隆盛になつたものといふ感じがいたします。

建物

明治九年——明治十七年(口繪)

建物は此の度が第四回目の園舎でございまして。第一回、即ちわが國に幼稚園としての最初の建物は、アメリカ式の洋風建築、やゝ高い目にて、廊下から庭へは階段で下りて行く程で、外廊下は手すりつきの、そのころすでに家根にはこの園にはゆかりの深い藤の蔓が匍ひのびてなかく、趣きのあつた建ものと見えます。當時は珍らしいものゝ一つとして、かなり世の人々の注目を惹いたさうでございしますが尤のことゝ思はれます。これが明治十七年九月大暴風雨にて全部倒潰、すつ

かり建て直すといふ有様ですから、どんなにはげしい暴風雨であつたかと考へられます。

明治十九年——大正十二年

それが十九年四月に同じ場所に新園舎が出来ました。それ迄の間を本校の寄宿舎食堂をしきりまして保育をつとげました。震災前迄つゞいたあの幼稚園外から見れば白壁の特に目に立つ、西歐に見る古城の址と云つたやゝ古代めく感じもありましたが、内部を歩いて見ても何となくゆつたりとして鷹揚な落つきのあるものとして心にのこつて居ります。その頃の保姆の丹精になるつるばらののび枝が白壁づくりの腰板を匍ふやうにもなりました、遊戯室に隣した参考室は今思へば幼稚園の寶物藏とも思はれるほど、貴重*



なものがぎつりしまつてございました。この幼稚園のことが次から次へと限りなく湧て出て来るのでございます。

殊に記して置きたいと存じますことは、皇太后陛下が御幼時附屬幼稚園にお通ひ遊ばされましたので、それはこの時の園舎でございます。震災後大正十三年十月二十七日行啓の折に、幼稚園の室々を御巡覽あそばして後、廊下を御渡りのみちすがら倉橋主事へあの藤の木はどうなつたとの御下問がありました由その日の夕刻、今日の感激におのおのが涙ぐみつゝ主事を圍んでの集ひの時話されましたことでございます。陛下が御幼時を偲ばせられてお尋ねあつたこの藤の木は、もと木は失

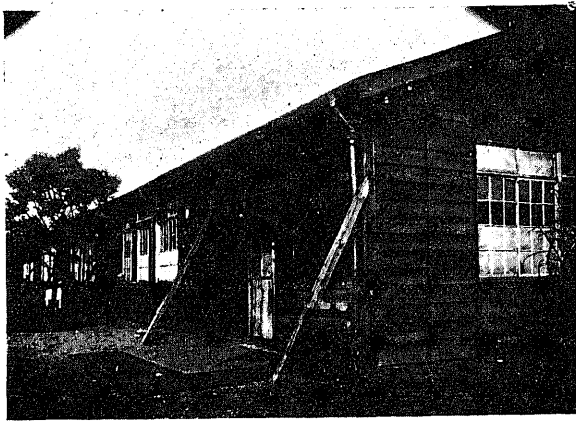
ひましたが、健氣にも根元から生長した一枝が生き／＼と一尺程ものびてゐるころでございました。

失つた藤のことは、誰もくく一しほの衷惜を感じて居りましたが、後、寄附する人のありまして、それも今は大分大きなものとなり、木は異にいたしましたし、幼稚園とのゆかり深き藤のおもかげをとどめるようになりました。

この節この建物を御存じの方も追々少なくなつて来たことがしみ

く感じられます。

それが大正十二年九月の大震災にて何のあともなく焼けてしまひました。しばらくは保育を休みその年の十月二十二日から翌年三月迄小石川區大塚町帝國女子専門學校の三室を借りて午前中の保*



* 育。三月の修了式はお茶の水の新築バラックで舉げました。

大正十三年——昭和七年

四月からの保育はやけあとに建つた木造バラックの幼稚園。假りの住居々々といひ乍らも、住みつゞけて八年になりますと相當に住み心地のよいものかしみこんでゐると思はれます。その時植えた樹木もいつの間にか上枝下枝が茂つてまゐりました。

さて今度移つて参る園舎は兎に角立派なもので、その點は日本一とでも申しませうか。長い間のバラツク根性が思ひの外しみ込んでゐるのではあるまいかと、新しい園舎を見る毎に取越し苦勞をいたして居ります。

保

育

幼稚園の保育の内容、即ち幼稚園での一日を如何にあつかふべきか、又保育科目はどんなものであつたか、いづれも、「幼稚園」「幼稚園記」や、後れて「二十遊嬉」この三つの翻譯保育書を参考にして始められたのでございます。幼稚園に關することの全部は、この三部の書から出たものでございます。「幼稚園」「幼稚園記」は、明治九年幼稚園が開設せられる以前すでに翻譯されて居りますので、開園直ちに必要な保育の方法は、これ等の書を読んで會得した最初の保姆の苦心からなるたまものでございます。保育方法の草分けをなされた最初の保姆の方々の苦心は、まづ保育方法の研究・保育科目の選擇材料を得る苦心、何から何迄が新しいことであつたことゝろみを特に思ふべきことでございます。

保育科目

- | | |
|-----------|-----------|
| 一 五彩球の遊び | 十二 環の置き方 |
| 二 鎖の連接 | 十三 針畫 |
| 三 木箸の置方 | 十四 織紙 |
| 四 剪纸貼付 | 十五 粘土細工 |
| 五 圖畫 | 十六 計數 |
| 六 木箸細工 | 十七 説話 |
| 七 紙片の組み方 | 十八 貝の遊び |
| 八 唱歌 | 十九 形體の置き方 |
| 九 遊戯 | 二〇 剪纸 |
| 十 三形物の理解 | 二一 縫畫 |
| 十一 形體の積み方 | 二二 墨紙 |

二三 木片の組み方

二五 體操

二四 博物理解

これ等を一日の保育に盛り組んで保育案が出来てゐたのでございます。これ等は、フレーベルの二十恩物を参照して定められたものでございますが、さすがに、そのまゝは用ひませんで、二者を比べて見ますと、取捨のあとがはつきりわかるのでございます。

唱歌、遊戯、談話等が、手技の一部である織紙や剪紙などと同列であるのも當時の保育を物語るものとしておもしろいではございませんか、又一日の保育を見ましても、いかに保育が恩物本位であつたかよくわかります。

一日の教育

登園

整列

遊戯室——唱歌

開誘室(保育室)——修身話か庶物話

戸外あそび

整列

開誘室——恩物——積木

遊戯室——遊戯か體操

晝食

戸外遊

これが明治十五六年ごろになりますと、多少改革されて、従来の西歐式保育をそのまま譯して用ひたに對して、わが國在來の幼兒教育法を幾分加味してまゐつた傾向が見えて參つて居ります。そしてすべてに、やさしく子供向きにといふ考へ方いろいろのことが改められて參りました。

明治二十年以後になりますと、保育方法に格別の變化を見ませんが、唱歌にしても、小學唱歌集、幼稚園唱歌集と相つゞいての刊行があつて從來の雅樂風唱歌から西洋樂譜を用ひた所謂本式の唱歌となりましたし、從來はあまり意とされなかつた談話が急に盛んになつてまゐりました。材料も、イソップの物語りを主とした話でございましたのに、わが國在來の物語りの中から題材を選ぶといふことゝなつて、あの牛若丸や、楠正成、かちく山などの昔話が幼兒向きにつくられたのでございます。有名な桃太郎の鬼征伐は、たしか明治二十五年に時の主事 中村五六氏が作られて、大層な評判であつた由、きいてゐることでございます。それ故二十九年五月の行啓には、昔噺桃太郎の和風折繪本を一冊づゝ幼兒へのおみやげにいたゞいたのでございます。

その後時と共に進んで參り、細い點では變化のあとを経て參つたことゝ思はれますが、明治四十五年頃迄は表面の小さい波のうごきがあるのみで、大すぢははじめとあまり差はなかつたのでございます。つまり、恩物は恩物の中での變化であり、又改良であつたので、その恩物そのものについては、開園當初と同じに用ひられてゐたのではありますまいか。時のうつりと共に最初のやうに恩物専らといふ程でもございませんが、これの中の一つは必ず一日の保育案に盛られてゐた記憶はかなり新らうございます。これとすつかり打ち切つてしまつたといふのは、つい最近のことでございます。それとても昨日を限りとして、びたりと中止してしまつたわけではなく、時と人によるなだらか流れによるもので、かうした

機會に過去をふりむいて見ますと、震災後いつの間にか今日の保育様式を形づくつてゐると云つた有様でございます。

さて又一面から考へますと、今日は事新らしくも無くなりましたが、社會生活をもととした所謂社會あそび、或は木工動物園あそびなども、かなり大きな計畫で震災前行はれたものでございます。分團保育のはじまつたのもこのころでございます。大正六七年ごろからは一方に恩物手技が儼然と存してゐる中に大きな計畫のものとされた新らしいこゝろみが折々加味された、いはゞ新舊相交はる過渡期とでも申しませうか。

さういへばこんなことがございました。倉橋主事のおすゝめで木工をはじめたのでございます。相談したわけでもございませんが、及川さんも私も停車場をつくりました。一寸その邊に見る犬小屋式のものでございましたが、改札口や切符賣場をつけて、紙を料としたものところがつて、手應へのあるこの製作は殊の外うれしうございました。コバルトに彩色をして、それが染料にを何つかつたかはつきり覚えて居りませんが、その外に階段をつけたり、ブラツトホームを足したのですが、粗末なこれをカンサスの田舎に見る停車場のやうなと主事がおつしやいました。これをほめられた方に解釋して内心得意でゐたのでございます。新しい木を買つてゐては大變だから木屑を求めてとの案で、ある材木屋から金拾圓也板のはし切れを荷車一ぱい運んで貰ひました。ところがこの板を一枚も使はないであの震災。たきつけを買ひ込んで置いたやうな結果になつたわけでございます。前々の方のおはなしによりますと木を材料とした製作はしてゐなかつたと伺ひましたので、木工のはじめとも見る思ひ出でございます。

分室のこと

女子高等師範學校附屬幼稚園は上流階級の子弟のはいるところとして一般世人から思はれて居りました、今でもさう思

つて居る人のあることを折々耳にいたします。それは中にはいつて見たものでなければわからないことであつてこゝで辨明は致しませんが、それが全く理由のない事もございません。創立が明治九年、小學校へはいるといふ事さへ一般の家庭で行はれてゐなかつたその頃、我が子を幼稚園に通はせる程の家庭はごく稀でありました。子供の教育によほど熱心な親か、外國の情況に明るかつた家庭か、或は、所謂貴顯の富豪親々が多かつたのでございませう。明治九年のころと聞けばさもあるべきとうなづかれるのは尤のこと、従つて、そういうふ家庭の幼兒故に、服裝から持物一般、さては送り迎ひの供人の事についても親は心をくだかねばならず容易のことでは無かつたらしく、一般家庭の子はいれぬ處と迄も極端に思ふ人もあつたらしうございます。これは幼稚園の趣旨とするところでは無く、全く時代の然らしむるところと、おことはりいたして置きます。従つて、これの流れを汲んで設立されました大阪の幼稚園にしても、又はその他民間にて是れを新らたに設置しようとするものも、かゝる困難を多少思ひみるといふ有様でございまして、これが今から考へますとはつきり理由がわかるのでありますが、當時としては兎角の風評もあつたらしく、明治十五年には文部卿の示諭といふことがありました。

文部省直轄の幼稚園は力めて園制の完全を期し、地方に設けるものゝ模範たらしめるために、頗る規模が大になつてゐる、此の如き偏制の幼稚園は都會でなければ設け能はぬものであり、又富豪の子にあらざれば、これに入る能はざるものといふ感を持たしむる嫌がある。併し幼稚園には別種のものがあつて、都鄙を論ぜず等しく之を設け、貧民力役者等父母として孩兒の養育をなす暇なきものゝ子を皆之に入れるべきである。

猶この種の幼稚園にありては偏制を簡易にし唯幼兒を保育擁護するの保姆を得て、平和に遊戯をなさしむれば即ち可い、是尙群兒街頭にありて危険又は卑猥の遊戯をなすものに比すれば、大いに優る所あり、其父母も係累を免れ、生

産を營むの便を得て、其益蓋し少小ならざるべきである。

これは全く時宜を得た示諭でありまして、これに由つて俄に幼稚園を設けるものゝ數もふえ、幼稚園そのものも大變こゝろ易く、一般から思はれるやうになりました。

この示諭を又考へて見ますと、たゞに當時のことばかりでなく、今日盛になつた託兒所の先鞭をつけた公令とも見るべきかと思はれます。それが直接お茶の水幼稚園には關連の無いようでございますが、明治二十五年九月には附屬幼稚園分室といふものが開かれました。これは今迄のものとは全く異つて居りますもので、分室の創設に關する事を読んで見ますと、全く、右の示諭をそのまま實際にあらはした幼稚園と思ふのでございます。設立の趣旨の中に、

當附屬幼稚園分室ハ東京市住民ノ生計上殆ド下級ニ近キモノ、兒女ヲ保育スル場所ニシテ之カ經理上ニ至リテハ大ニ費用ヲ節シテ保育ノ効果ヲ收メシト講シ後來地方ニ廣ク設置スヘキ幼稚園ノ模範タランコトノ希望ヲ有スルモノナリ（下略）

分室假規則中に、

第二條 保育時數ハ日ノ長短ニヨリ毎週三十三時以上四十三時トス

但シ家庭ノ都合ニヨリ毎日保育時間中早歸遲參ハ隨意トス

第四條 保育料ハ之ヲ徴收セス 等

なほ幼兒募集を讀んで見ますと、分室を開いた時の狀況がはつきりとわかるのでございます。

當分室ノ如キハ本邦ニ在リテハ管テナキ一種ノ幼稚園ナレハ之ヲ設置スルニ當リテハ萬端注意ヲ加ヘ殊ニ幼兒ノ種類ノ如キハ當方ノ所望ニ違ハサランコトニ留意シ明治二十五年八月四日神田本郷兩區役所ニ之カ募集方ヲ依托セリ爾來凡ソ一ヶ月ヲ經九月初旬ニ至リテ尙一人ノ應募者ナシ蓋シ當方ノ旨意父兄ニ通達スルコト間接ナルヲ以テ十分ナル能ハス且ツ區役所吏員ノ事務繁多ニシテ能ク力ヲ盡スノ暇ナカリシニ因ルヘシ是ニ於テ其方法ヲ改メ當校附屬小學校分教室即ち現時ノ第三部並ニ高等師範學校附屬單級學校ノ各擔任教員ニ托シ又本校小使等ニ頼リテ學校近傍住民ノ兒女ヲ募リシニ之ニ應スルモノ忽ニシテ四十名ヲ得タリ乃チ九月二十、二十一日ノ兩日ヲ以テ應募幼兒及父兄ヲ招集シテ當分室設置ノ主意入園手續又心得等左項ノ條件ニ付丁寧ニ之ヲ語り年齡ニヨリ幼兒三十三名ヲ選擇シテ入園ヲ許可スヘキ幼兒ヲ定メタリ

その他のことは餘り細かになりますので略しますが、規則の中にも、又分室開園について當校長の演説の中にも、分室にはいる幼兒並びに家庭に對しては、特にあたたかい思ひやりがこめてございます。例へば、

午飯ノ用意モ必要ナルカ辨當ヲ持參スルコトハ隨分面倒ナルコトニテモシ又人前ニテ開クコト故餘リ見苦シナト思ヒテ別ニ用意スルカ如キコトアラハ費用モ多クナリテ續キ難キコトトナルヘシ夫等ノ心配ナク有合ノ品ニテ苦シカラス握リ飯ヲ竹ノ皮ニ包ミテモヨシ麵麩ノ切ニテモ菓子パンナドニテモ飢ヲ凌グニダニ足ル位ナレハ差支ナカルヘシ

かうして始められた分室は、本園とは、園舎も別であり、而もその保育方法は兩者に區別あるわけではなく、「當分室八月對ヲ徵收セサレトモ幼稚園ノ本旨ヲ守ルモノ、ニシテ」とあるやうに、こゝへ入園した幼兒は立派な保母の手のもとに保育されて仕合せな一日を送つて家へ歸つたのでございます。

これは、所謂託兒所とは全く趣きを異にする機關であります、この第一の開始とも見れば見られませう。東京に於

てこの託児場の最初のもが明治三十三年東京二葉保育園でございますか、明治二十五年に於て附屬幼稚園にその端を發して居ります。

貴族富豪の子弟の幼稚園とのみ思はれて居た附屬幼稚園が、分室を設けたことは、最も適當な計畫であつたと思はれます。我が國幼稚園の第一を創設いたしました一方に、又特にかゝる保育の草分けをしたことについては、かういふ事に着眼した先覺者を持つことのほこりさへ感じられるのでございます。

その後東京市内ばかりでなく各地でもかゝる企てが試みられて参りましたことは、すでに御承知のこと、附屬幼稚園は震災後は建物の都合もありまして、この分室は自然分室として實行出來ないことになつたのでございますが、一般にかゝる設備が普及して参りましたので、これの使命は立派に果したのでございます。大塚にうつりますれば、いよくこれと土地につながる縁さへ打ち切るといふ形になりますので、お茶の水を去るにあたりましてあらためて記して置いたわけでございます。

フ レ ー ベ ル 會

日 本 幼 稚 園 協 會

いま日本幼稚園協會は附屬幼稚園に會の本部を置いて、月々機關雜誌「幼兒の教育」を發行致して居ります。これは勿論みな様の會であり、雜誌もみな様のものですが、こゝお茶の水で誕生いたしましたのでございますので、これを一こと書き記して置きたいと存じます。

フレイベル會と云つて、幼稚園關係者の人々が相寄つて幼兒教育に關することの研究の會が、明治二十九年に出來まし

た、これとても俄に成立したのではなくて、それ以前からより／＼集つてゐた會合が一團となつたのでございます。即ち附屬幼稚園では、保姆會と稱して、幼稚園に關する研究會があり、一方市内各幼稚園にても保姆研究會があつて、同じく保育に精進してゐました。これが別々に二つ列んで居るよりも一つになつて、さらに深く研究を積んで行つたらといふ提案が出まして、忽ち是がまとまつて新らしい大きい會になつたのでございます、フレーベルの誕生日がよいであらうとの事で、明治二十九年四月二十一日にこれの發會式がありました。

この會から毎年一回づゝ報告書を出して居りましたが、後機關雜誌「婦人と子ども」が發行されましたので、保姆諸氏の研究の結果や各幼稚園の狀況などを報告しあつたのでございます。

これが大正七年迄つゞきまして、この年十月十二日フレーベル會總會が開かれ、會名、會則、雜誌の題號が改正されました、そして従來「婦人と子ども」と稱してゐた雜誌は、「幼兒教育」の名に改へられたのでございますが、後又「幼兒の教育」となつて今日に及んで居ります。

この雜誌も思へば、度々の變化で今日の名稱となつたのでございます。

一、フレーベル會報告 自明治三十一年四月
至大正三十三年十二月

二、婦人と子ども

自明治三十四年一月
至大正三十七年十二月

三、幼兒教育 自大正八年一月
至大正十二年六月

四、幼兒の教育 自大正十二年七月

ぼつ／＼と思ひつゝいたまゝを記しました、こゝでの長い五十七年間をほんのかいつまんでみたもので、書いてまゐる中に、いろ／＼と思ひ浮んでくることもございますが、到底こゝには述べつくことは出来ませんし、あまり多岐になりませんので、この位にいたして置きますが、お茶の水幼稚園については數々の語りぐさをお持ちの方が多いことゝ存じますので、さういふ方々の興味あるお話をお願いいたしまして號を追ふてみなさまにお知らせ申し上げるつもりで御座います。

終りに一こと移轉を前にしてかうしていろ／＼考へて見ますと、わが國幼稚園發祥の地をさらりと捨て、行くことが、今更のやうに惜しまれるのでございます。と申して、それは目前にせまつた餘儀ない事實でございます。人住まぬ建物へのおこがれがあらう筈はなく、やがて日頃用ひなれた手まはりの品々が運ばれて、小さい机と椅子が並び、さらにまた昭和八年一月八日にあの幼児達が定められためい／＼の室にはいつてまゐりますれば、又どう心が變るかわかりません。又廣々とした庭に順次植えられてゆく木々によつて、どんなに趣き深い幼稚園になるかもわかりません。まゐりはじめはさぞ落つかぬ幾月かを過すことゝ存じますが、御近くにおいでの際はどうぞお立寄り下さいませ、お待ち申して居ります。

フレイベル館 創立二十五周年 記念講演會の盛況

「キンダーブック」并に「ツバメノオウチ」の發行所であるフレイベル館では、今年が創立二十五周年に當るので、十二月十日を卜し謝恩の意味で記念講演會并にキンダーブック原畫展觀と社長外遊みやげ玩具展覽會を開催された。

午後一時半開會、社長高市次郎氏の挨拶があつて、東京女高師教授倉橋惣三氏の「物による教育」東洋家政女學校校長邊福雄氏の「白丸時代」といふ講演があつて、副社長で大阪支店長の高市慶雄氏の挨拶後、演藝に移り、ギニョール(峠の茶屋)、紙芝居(護れ聯隊旗)

石井漢氏社中の舞踊數番が演ぜられ、午後五時閉會。

當日は美しい原畫と可愛い外國の人形、珍らしい玩具、社長自作の自然木玩具など、容易に得られない珍品揃ひであつたので、觀覽者の眼を惹き足を止めさせ、若き奥様、子煩惱のお母様など、もう子供のやうになつて喜んでゐたのが眼についた。中にも特別陳列の社長自作の玩具には、男子の注意を惹き、其巧妙な自然木の見立て方について感服してゐる人が多かつた。參會者は何れも社より贈られた記念品を手にして如何にも満足さうに靜かに散會したが、文字通り立錫の餘地なき盛會であつた。